

清末から民国初期の中国における女子教育の勃興

—湖南省女子学生の日本留学を例として—

The Rise of Female Education in Late Qing Dynasty to Early Republic of China

—Using the Example of Female Students from Hunan Province Studying in Japan—

唐 寅 霖*

Yinlin TANG

1. はじめに

1.1 研究背景と研究目的

現代社会において、女性の地位向上と教育の関係はジェンダーやフェミニズムの観点から注目される課題である。近代以前の中国に目を向けると、多くの女性が社会において、封建的な価値観の影響により学校教育を受ける機会がなかった。女性は男性に依存せざるを得ず、女性の社会的地位は非常に低かった。近代以降になると、西洋の先進文明の導入や社会運動の展開に伴い、女性解放や女子教育の問題が注目されるようになった。

近代中国の地域的状况を見ると、湖南省から中国全体に大きな影響を与えた人物が多く輩出されていることは注目に値する。例えば、清末の重臣である曾国藩は、湘軍¹を組織するなど、中国近代化、洋務運動²を推進した。曾国藩の一生は極めて伝説的で、輝かしい功績を残している。中華人民共和国を建国した毛沢東も湖南省出身で、彼は中国の歴史を変えるような重要な役割を果たした。また、近代中国における女性運動は、清朝末期から民国初期にかけて、そして五・四運動の前後の二つの時期に分けられるが、いずれも湖南省の女性が重要な役割を果たしている。特に、女子教育の道を最初に切り開いたのは湖南省であり、湖南省の留学生は中国の女子教育の発展に大きく貢献した³。しかし、これまでの研究では留学生が軍事や政治などの分野でどのような貢献をしたかに焦点が当てられており、教育の発展に与えた影響についての研究はほとんど行われておらず、なかでも女子教育に関する研究はほとんど見られない。

先行研究によると、近代の湖南省出身の留学生や、湖南省出身者の留学経験に関する著書はなく、留学教育に関する以下の著作に散見されるだけである。嚴安生の『靈台無計逃神矢—中国人留日精神史』がそ

* たん いんりん 国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程
指導教員：金縄 初美

¹ 湘軍は、清末の湖南地方の軍の呼称で、湘勇ともいう。太平天国の乱を清朝の正規軍は鎮圧できず、やむを得ず清朝政府の命により各地の郷紳に臨時の軍隊を組織させた。これを郷勇と呼び湘軍はその一つであった。

² 洋務運動は、19世紀後半の中国で、李鴻章や曾国藩ら清朝の漢人官員により推進された一種の近代化運動である。

³ 李秋艶・屈振輝・歐陽林舟 2018年「近代湖湘女留学生与婦女運動」『当代教育理論与实践』P148参照

の一つである。この著作では、前半の4章で人類館事件⁴を中心に、留学生が当時の時代背景で参加した拒俄運動⁵、「留学生取締規則」反対運動⁶などの出来事とその背後にある原因を探求している。後半の2章では、留学生が受けた精神的衝撃を日中文化の摩擦の観点から分析しており、多様なケースを比較することで、清末の留日学生を精神史を探求している。

また、実藤惠秀の『中国人留学日本史』は、留日現象の背後にある背景やプロセス、そして中国の近代学術、文化、政治、軍事への影響について調査を行っており、1896年から1937年までの留日運動の起源と展開、留日学生の学校とカリキュラム、留日学界の政治組織や活動、そして留日学生の中国近代の政治革命、教育発展など分野への貢献と影響について詳細に述べている。

中国女性の日本留学に関する研究には、周一川の『近代中国女性日本留学史（1872年～1945年）』がある。この本は清末（1872～1911年）、民国初期（1912～1927年）、民国中後期（1928～1945年）の区分で、女性の日本留学の歴史を論じており、日中両国に関する多くの関連情報をまとめ、民国初期の女性の日本留学の状況や歴史的变化、その原因に焦点を当て論じている。

これらの先行研究から分かるように、現存の研究は留学生に焦点を当てているものが多く、近代女子教育の発展を探究するための著書や論文はほとんど存在せず、湖南省の地域的特色に焦点を当てた研究はさらに限られている。そのため、近代湖南省の留学生の視点から、女子教育の発展を研究することは重要な課題であると言える。

本研究は湖南省の近代女子教育研究を一層充実させるものであり、湖南省の女性教育の展開に注目し、フェミニズムの土着化理論に基づいて中国の女子教育における近代日本の留学教育が与える影響と役割を探る。

1.2 フェミニズムと土着化理論

「フェミニズム」とは、性の違いによって生じた女性の不利益を不当なものとし、その是正を求める主張のことをいう。この言葉が初めて使われたのは1890年代のフランスだったが、それ以前の時代に、フェミニズム的な思想がみられなかったわけではない⁷。第一波フェミニズムと呼ばれる女性運動はアメリカとイギリスでは慈善運動、教育における男女平等の要求から参政権の要求へというプロセスを辿った点では類似していた⁸。「Feminism」が西洋独自の文化的背景に基づく思想であるとしても、それを中国語で「女性主義」または日本語で「フェミニズム」と翻訳することが単に西洋からの輸入品であるとみなすべきではない。なぜなら、これらの概念は既に中国や日本固有の文化的背景や社会状況と結びついて、独自の概念を形成しているからである⁹。

溝口靖夫（1964）は土着化の概念を以下のように規定した。「土着」という漢字は辞書によれば「その地に永く住みつくこと」となっており、「化」は「…（の状態）にする」の意である。そのため、或る文化は特定の土地にもともと生まれ育っているのであれば「土着」であって「土着化」とは言わない。「土着」

⁴ 人類館事件は、1903年に大阪・天王寺で開かれた第5回内国勸業博覧会の「学術人類館」において、台湾高山族（生蕃）・沖縄県（琉球人）・朝鮮（大韓帝国）・清国など合計32名の人々が、民族衣装姿で一定の区域内に住みながら日常生活を見せる展示を行ったところ、沖縄県と清国が自分たちの展示に抗議し、問題となった事件である。

⁵ 拒俄運動は日本留学生の間に起きたロシアの中国東北支配に抗議する運動である。

⁶ 清朝は、日本政府に革命派の多い私費留学生の取締りを依頼し、これを受けた文部省は、清国留学生取締規則とよばれることになった省令第19号を公布した。留学生は一斉にこれに反発、同盟休校あるいは即時帰国を主張するなどして対抗した。

⁷ 梅垣千尋 2023年「フェミニズムの萌芽」『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房、p46参照

⁸ 奥田暁子 2003年『概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房、p87参照

⁹ 陳晨 2022年「20世紀80年代中日婦科学 / 性別研究本土化的比較考察—以李小江与上野千鶴子的理論実践為線索」『日本文論』、p144参照

でないものを「土着的にする」「土着の様な状態にする」ことが「土着化」である。文化社会学の概念で言えば、広義の適応の現象である。しかし、単に適応と言え、外来のものであることが明らかでも闘争対立がない場合適応と言えるけれども、少なくともそこには新環境との間の調和が存在する現象であり、更には外来のものであることが認識されないか忘れられるに至っている状態である。もう一つ近似概念としては「同化」がある。しかし両者を比較すると、同化は二つ以上の文化又は文化の主体がその差異を捨象して類同点を極度に増大し行く結果生れる現象であり、複数の文化又はその主体間の異同に関する概念である。それに対して、土着化とは、単にそれらのものが異なるが同じ様であるかと言うだけではなくして、そのものの環境との関連におけるオリエンテーションが問題となっているのである¹⁰。

本文は、土着化理論を通じて、フェミニズム思想が発祥地から日本に伝わり、日本社会に適応し、日本独自の特徴を持つようになって新たな日本のフェミニズム思想ができた過程を説明する。また、中国の女子留学生が日本でフェミニズム思想に触れるとともに、中国社会での実践を通じて、中国人に適した思想が生まれた経路を分析したい。

1.3 早期の近代女子教育状況

長きにわたり、中国の女性は公的な教育制度から完全に排除されてきた。伝統的な女性教育は、三従四徳¹¹の教えのみであったと言えるだろう。近代的な意味での女性教育は、宣教師によって設立された教会の女学校に起源を持っている。中国人運営の女子学校と比較して、教会の女学校は50年以上も早く設立された。アヘン戦争の後、強制的な開港を通して多くの宣教師が中国本土に入学した。宣教師は中国の女性の状況に深く同情し、すべての女性が男性と同等の教育を享受することを願い、女子学校を設立した。彼らが中国に入学して最初に気付いたのは、中国の女性が家を出られないという制約、そして纏足などの肉体的な苦痛に苦しんでいるということだった。そのため、宣教活動中、特に教会の女学校を設立することにより中国の女性が知識を獲得し、家庭の束縛を打破し、社会に参加する手助けをしようとした。

最初の教会の女子学校は、1844年にイギリスの宣教師であるメアリー・アン・オルダーシー (Mary Ann Aldersey) によって寧波に設立された。その後、教会の女学校が続々と登場し、1860年には12校の女子学校が存在していた。1844年から1860年までの期間は、教会の女子学校の初期段階と呼ばれる¹²。この時期、教会の女子学校は社会に認知されておらず、小規模かつ建物は質素であった。生徒は主に教会関係者の子供、孤児などで構成されていた。生徒を引き寄せるため、学校は無料の食事と宿泊を提供するだけでなく、親に現金や食糧を施した。

第二次アヘン戦争後、宣教師が内陸で宣教活動を行うことが合法と認められ、世論の偏見は減少傾向にあった。そのため、教会の女学校の規模、生徒数、教育水準などは急速に発展し、第二の段階に入った。1876年の統計によると、寄宿学校が39校で生徒数は794人、一般学校が82校で生徒数は1307人であった。1880年代以降、女学生の不足問題はなくなり、一部の学校では定員を超え、受け入れを拒否せざるを得ない状況さえ発生していた。1902年の記録によれば、初等蒙学堂(幼稚園)を除くと、全国の教会学校には合計で10158人の生徒がおり、そのうち女子生徒は4373人で、全体の43%を占めていた。また、1907年に清朝政府が行った統計によれば、吉林、新疆、甘肅など一部の地域を除いて、他の全ての省で女学堂が設立され、全国には428校の女学堂があり、在校生は15496人で、そのうち約90%が教会の女学校だった。同時に、中国で最初の女子大学である華北協和女子大学が設立され、続いて華南女子文理学院、金陵女子文

¹⁰ 溝口靖夫 1964年「キリスト教の土着化の社会的理解—その方法論的考察—」『神戸女学院大学論集』、p19-21参照

¹¹ 三従四徳は、東アジアの儒教、特に古代中国と帝国中国における乙女と既婚女性の一連の道徳的原則と行動規範である。女性は父親、夫、息子に従い、行動と発言において慎み深く道徳的であるべきだ。

¹² 万瓊華 2010年『近代女子教育思潮与女性主体身分構建—以周南女校(1905-1938)为中心的考察』中国社会科学出版社、p61参照

理学院などが設立された¹³。

また、教会の女子学校は、中国人が創立した女子学校の手本となる多くの要素を提供した。清末において、一部の官員が西洋諸国を訪れて女子教育を調査した例を除き、多くは教会の女子学校から影響を受けた。

当時、中国人によって設立された女子学校の中で、最も影響力のあるものには、1898年に上海で創立された中国女学堂、1902年に天津で創立された巖氏女学堂、上海で設立された務本女学堂、蔡元培と蔣観雲によって設立された愛国女校、1903年に長沙で設立した湖南国立第一女学などが挙げられる¹⁴。各地で女子教育が盛んになった状況の中で、清朝政府は国内の世論に圧力を受け、官立女子学校を検討せざるを得ず、新政策の導入に応じる必要があった。「女学堂章程」はこの状況下で制定された。

1907年1月24日、清朝政府は「女子小学堂章程」と「女子師範学堂章程」から構成された「女学堂章程」を公布した。この章程によれば、女子は8年間の小学教育と4年間の師範教育を受ける権利を持ち、実質的には男子の教育とは別に、女子のための教育軌道を設立したことを意味している。これらの章程は、女子が初めて正規の教育を受ける合法的な権利を持つことを意味し、女子教育の発展に寄与した。

2. 中国女性の日本留学への契機

日清戦争後、中国人は次第に「日本が勝利を取めた理由は、ヨーロッパの文化や政治制度を取り入れ、教育に重点を置いたためである¹⁵と認識するようになった。1901年、清政府は改革を宣言し、「新政」を実施すると発表した。この新政とは、近代軍隊の育成、官僚制度の改革、近代学校の設立を主要な内容としており、外国語を理解し、近代科学技術を習得した人材が急務であったため、清政府は積極的な日本留学政策を採用した¹⁶。

中国人女子の留学教育は、男性の留学の発展過程から生まれたものであり、男性の留学の副産物と言える。彼女たちは初め、日本に行く際に政府の政策とは無関係でほとんどは父や兄、夫に従って来日し、日本の女学校などの教育機関で学んだ¹⁷。これらの留日女学生が次第に中国に影響を与えるようになり、ますます多くの中国の女性が自費で日本に留学するようになった。

2.1 近代中国における日本留学の増加

1840年と1860年の二度のアヘン戦争の敗北により、清朝政府は西洋諸国の強大さを理解し始めた。中国の「天朝大国」¹⁸の地位を守るために、清政府は「師夷之長技以制夷」（西洋人の進んだ技術を用いて西洋人を制する）という国策を確立し、民族的危機に立ち向かいながら「中体西用」¹⁹を方針とする洋務運動を開始した。彼らは欧米の近代技術を導入し、清朝の衰退を回復しようとして、近代的軍隊の組織、官営軍需工場の設立、鉱山の開発、外国語学校の開設などを行なった。中国の近代留学生の派遣もその重要な一環となった。また、西洋の先進技術を学び、近代的な軍事産業や民間企業を構築するためには、外国語を

¹³ 万瓊華 2010年前掲書、p61-62参照

¹⁴ 万瓊華 2010年前掲書、p62参照

¹⁵ 聶会会 2007年「中国近代女子教育発展歷程中的「女性参与」探究」修士論文、p12参照

¹⁶ 周一川 2007年『近代中国女性日本留学史（1872年～1945年）』社会科学文献出版社、p7参照

¹⁷ 周一川 2007年前掲書、p12参照

¹⁸ 封建時代の臣下は自分の国の朝廷のことを「天朝」を尊称していた。

¹⁹ 清朝末期の改革運動である洋務運動の理念。西洋の技術は取り入れるが、思想は中国の伝統を維持するという。洋務運動における漢人官僚の姿勢となった理念。「中学を体となし、西学を用と為す」の略で、中学とは中国の伝統思想のこと、西学とは西用の学問で、それはあくまで技術（用）としてのみ受け入れる、という精神をいっている。

理解し、西洋を知り、近代技術を掌握する人材が必要であり、それが清末の欧米留学の背後にある要因となった。

1894年から1895年にかけての日清戦争で、清政府は壊滅的な敗北を喫した。この戦争により、多くの欧州留学生からなる北洋艦隊²⁰の将兵が海の底に葬られるとともに、洋務運動が西洋の先進技術を用いて大清封建帝国を救済するという夢は打ち砕かれた。アヘン戦争とは異なり、日清戦争は小国である日本に敗れ、中国人に大きな衝撃を与えた。敗北により、中国人は日本がどのようにして短期間で強大になったのかを真剣に考え始め、日本研究の潮流が形成された。中国の一部の人々は、日本の勝利の要因は普及した教育と法治の実施であると考えた。したがって、戦後2年目から中国は早速13人の留学生を日本に派遣した²¹。

また、実藤恵秀は、中国人が日本への留学を選ぶ理由について以下のように述べている²²。第一に、当時の中国は近代化の方面で大きく遅れており、急速に日本に追いつく必要があった。同じ東洋の国である日本から学ぶことは、直接西洋から学ぶよりも簡便で有利であると考えられた。第二に、言語の問題である。中国と日本の両国は漢字を使用し、同文とされている。これに関連して、中日両国の習慣や風俗が多く類似しており、留学生が生活面で比較的適応しやすい状況である。そして、近い距離にあるという理由もある。留学生は国の未来を担う存在であり、中国の留学生の中には当時重要な役割を果たす人々もおり、祖国に何かあった場合にはすぐに帰国することができた。さらに、学費の面も関係している。西洋に比べて日本の生活費はずっと安かった。そのため、隣国である日本が理想的な留学先であると考えられた。

中国各地域で日本留学が増加するなか、湖南省からの留学生が多いことが注目される。湖南省は古来より独特の激しい情熱と壮大な気質を持つ地域であることから英雄たちが輩出される地域でもあり、中国においては湖南省出身の人々は常に影響力をもっていた²³。地理的な特徴から見ると、湖南省は北に長江が広がり、南は山々に囲まれ、広東省と接しており、西は貴州省や四川省と接している。湖南省は言うなれば、漢文化の中心地から少数民族が集まる地域へと広がる中間地帯であり、近代以降、広東省から上陸した英仏の侵略勢力や洪秀全率いる太平天国軍²⁴の北上の途中に位置している。この地域特有の文化史や政治史から見ても、湖南省は野心的で、理想を持ち、固執したり前向きだったり、戦闘的な要素を持つ人々の気質が育まれる場所である。特に湖南省出身の曾國藩は、中国で最初に学生を留学させることを支持した中国人の一人だった。彼と彼を支持している文人や高官たちは、19世紀後半の中国において強力な勢力を形成し、湖南省に大いに恩恵を与えた。その一方で、士族や文人の勢いが膨らみ、その後の湖南省は改革と革命運動の発祥地、そして激しい戦場となった²⁵。

1902年8月、湖南出身の俞廉三、胡元倓、陳潤森、周家純（別名朱劍凡）など12人（実際には11人が出発）、主に科挙²⁶出身で30歳以下の若者たちが日本の弘文学院の速成師範班に留学した。これは湖南省から派遣された最初の公費留学生であり、学業を修了後、師資と学校運営の責任者として活躍することが期待された。同年、湖南省巡撫²⁷の陳寶箴は新政を推進し、民間の支援を受けて楊昌濟、仇亮、陳天華、劉揆一など34人を日本に遊学させた。1903年には、湖南省当局は第二段として24人の留日学生を派遣し、彼ら

²⁰ 北洋艦隊は、清朝海軍の艦隊である。清国では北洋水師、または北洋海軍と呼ばれた。

²¹ 実藤恵秀 1983年『中国人留学日本史』生活・読書・新知三聯書店、p16参照

²² 実藤恵秀 1983年前掲書、p16-17参照

²³ 嚴安生 2018年『靈台無計逃神矢—中国人留日精神史』生活・読書・新知三聯書店、p36参照

²⁴ 洪秀全が中心となって起こした1851年から1864年にわたる近代中国の大農民反乱。

²⁵ 嚴安生 2018年前掲書、p36参照

²⁶ 科挙とは、中国漢代に起源をもち、隋・唐代から始まって清末まで続いた、官吏登用試験である。

²⁷ 巡撫は、中国の明代及び清代に存在した地方長官である。

は師範科目や理学、法学、工学を学び、帰国後は3年間の教職に就いた²⁸。

2.2 湖南省女性の留学

長い中国の封建社会において、「女子無才便是徳」（女性は学がないのが徳である）などの考えの影響を受けて、女性は男性と同等の教育を受ける機会を失い、家庭内で三従四徳の封建的な礼儀や道德規範を学ぶことになった。一部の進歩的な官僚や地主の家庭を除いて、一般の女性はほとんどが無学文盲だった。アヘン戦争の後、外国の宣教師たちは中国沿岸の都市に女子学校を設立し始め、中国の女性が学校教育を受ける禁域を破り、女子教育は次第に有識者の関心を集めるようになった。

20世紀初め、日本の良妻賢母の概念が中国に伝わった。しかし、中国の革命派は、女性も国民の一部であり、国家の責任を担うためには、良妻賢母の教育だけでは不十分であると考え、「女国民」という教育思想が広まった。この概念や呼称は、1903年に初めて登場し、女性が日本で学んだ経験と関連している²⁹。当時、中国全体で女性の教育はあまり重要視されておらず、封建的な考え方が根強く、中国の女性は多くの束縛を受けていた。一方で、日本は1872年に学制を導入し、「男女を問わず、親や兄弟は子や妹に小学校の教育を受けさせる責任を持つ」という規定があった。更に、一部の地域では、学制が公布される1、2年前には既に女子学校が開設されていた³⁰。

最初に中国の女学生が東京に来たのは1900年である。当時、清朝の教育制度の規定は1903年以前でも、女性の留学どころか女子学校すら地位を持っていなかった。1900年には、日本に留学している中国の女性学生はわずか3人であった。1902年には20人以上に増え、その後も年々増加していった³¹。

最初の数人の女学生は、駐日外交官の娘や早期の留學生の妻であった。彼女らはここで華族女学校と帝国婦人協会附属実践女学校の校長下田歌子に出会った。そのため、下田歌子は一部の人々から、中国人女性の日本留学の事実上の推進者と見なされている。女子留學生が日本へ留学する理由はそれぞれ異なり一概には言えないものの、留学期間中に独立心と尊厳の意識を示し始めた点では共通している。

1905年7月から1907年までの間、中国の学制はまだ女子学校の地位を持っていなかったが、一部の地方政府や革命者は女子教育を力強く推進し始めていた。また、下田歌子が実践した中国女性の留学教育は徐々に知られ、その影響により多くの中国女性が日本に留学するようになった。湖南省は下田歌子に対して20人の公費女学生を日本に留学させる要請を行い、これにより実践女学校は従来の教育方法や管理策を変更した。1905年に着任した湖南巡撫の端方は西洋を視察し、時勢に通じていたことから着任後は留学政策の推進を強く主張した。端方はその年早速、黄萱祐、張漢英など20人の女子学生を日本の実践女学校に派遣し、師範教育を受けさせた。これらの学生の多くは湖南省の女子学堂の第一女学や影珠女学から選ばれた。これは湖南省における女性留学の初めての試みであり、中国の公費留學生の始まりとなった。このため、下田歌子は中国の留學生のために独自の分校を設立し、「清国女子速成科規定」を制定した。7月末、湖南省からの20人の公費生が分校に入学し、1年間の特別コースに進んだ。そのうち13人は師範科、7人は工芸科であった³²。

統計によれば、1904年には全国で3000人以上の留學生が日本におり、湖南省だけでも総数の四分の一を占める800人以上がいた³³。留學生は新たな文化環境に身を置き、ヨーロッパの啓蒙思想家の著作を読むことで、天賦の人権、君主の権威、民主共和制などの思想について初歩的な理解を深めた。これにより、留

²⁸ 万瓊華 2010年前掲書、p76参照

²⁹ 万瓊華 2010年前掲書、p68参照

³⁰ 実藤恵秀 1983年前掲書、p53参照

³¹ 万瓊華 2010年前掲書、p69参照

³² 周一川 2007年前掲書、p18参照

³³ 万瓊華 2010年前掲書、p76参照

学生たちの文化的視野が広がり、意識や考え方も変化した。

また、独身の女性留学生も次第に増えていった。例えば、革命のために犠牲となった秋瑾は、一人の息子と一人の娘を持つ母親であったが、国の状況を目の当たりにした彼女は国事に奉仕するため、高値の收藏品を売って学費を捻出し、夫と別れて子供を近所に預け、単身で日本に留学した。秋瑾は漢学者の服部繁子から日本の女子教育の発展状況を聞いた後、中国の女性教育事業に従事するために学業を修めて帰国したいと考えた。彼女は同様に独立心と強さを持つ友人である唐群英などに日本留学を宣伝するなどして、ますます多くの志を持つ湖南省出身の女性たちが日本に留学するようになった。

3. 湖南省女性の日本留学における経験

女子学生の日本留学は、中国の女子教育が外国文明から多くの知識を吸収するための道を提供していた。先進的な西洋の女子教育の考え方と組織モデルは、これらの進歩的な女性に思考面で大きな衝撃を与え、中国が女性に対して行ってきた教育に対する抑圧を否定するよう促し、反抗の意識を喚起させた。こうして、長きにわたる封建的な伝統の女性の檻を破り、女性は社会で自分の才能を発揮するために男性と肩を並べることができるようになった。彼女たちは勉学に励む一方、愛国的な女性団体である「共愛会」や「留日女学生会」などを積極的に設立し、また「留日女学生会雑誌」などを通して女性の解放を宣伝し、女子教育を唱えた。

3.1 日本に留学する女子学生の変化

1893年、下田歌子はイギリスで欧米の女子教育学を研究し、それが中国の女子教育の推進に貢献し、良妻賢母の教育思想を通じて中国人の改造を促進し、中国と日本のアジア人という共通の背景を持つ人々が白人の思想に対抗するために共に繁栄することを目指した。彼女は女子教育に国家意識を持たせるべきだと主張し、これが国家の魂であり、教育の精神であると述べた。彼女は女子教育を男子と同じく国民教育体系に組み込むことを強調し、女子を一人一人の国民とみなして教育の機会を与え、中国の伝統的な良妻賢母とは異なる新しい種類の良妻賢母にするべきだと考えた。

下田歌子は当時の日本では女性が結婚すると家庭の責任を負わなければならない、老人と子供の世話をしなければならないため、専門的な研究に集中するのは難しいと考えた。同時に、女性が高等教育を受けると結婚の年齢に影響を与える可能性があるとも考えた。したがって、高等教育を受け、専門的な研究に従事することは、女性にとって慎重に考える必要がある。20世紀初頭の日本は社会的に複雑で混乱しており、女性の中等教育と高等教育も始まったばかりであったため、下田歌子は女子高等教育を盲目的に追求せず、日本の状況に基づいて、将来の生存に必要な女性教育の安定した発展を提唱した。

下田歌子は西洋の女子教育思想を受け入れながらも、儒教思想と武士道精神を継承した。彼女が育成しようとしたのは、家庭を重視する新しい女性であった。結婚後、女性は妻として、母として責任を持つべきであり、女性の美德を守ることが本分であるとした。女性が適格な妻と母になるためには、裁縫、家政、育児、健康などの知識と技能を習得し、日本の伝統的な女性の美德を守る必要がある³⁴。このように、下田歌子は時代の進化と共に、女性の地位も大きく変化する中でも、伝統的な女性の美德を守るべきだと考えていた。

下田歌子の教育目的から見ると、師範科と工芸科の速成コースを開設するのは、独立した生活ができる新しい良妻賢母を育てるためである。実践女学校が中国の女性留学生と中国の知識人から支持された理由は、新しい良妻賢母を育てるという彼女の教育目標と密接に関連している。そのため、師範科と工芸科を

³⁴ 方祖猷 2017年『晚清女権史』浙江大学出版社、p257参照

実践女学校の一部とし、入学条件を「本科生徒須年齢在十五歳以上、有寄留日本确实之本国人為之保証者」(学部生の年齢は15歳以上で、日本に居住している中国人が保証人として必要である)といった規定を設けた。

さらに、学生の規則も以下のように非常に厳格であった。

- 1) 舎監や教師と外出することは許可しない。
- 2) 会客は保証人の証明が必要で、指定された部屋でのみ面会が許可される。
- 3) 豪華な衣服や装飾品の使用は許可しない。
- 4) 親戚と同居する場合、親戚の入学が許可される。
- 5) 学費、入学料、食費、宿泊費、衣類費など、年間の総費用は215.5円であるが、書籍費、医薬品費、その他の雑費は除外される³⁵。

これらの規則と規定は、学生が学校の要求を厳格に遵守し、下田が想定した新しい良妻賢母の基準を持つようにさせ、独立した生活を送り家族を支える能力を持つことを確実にすることや、女性の積極的な社会参加の促進、そして伝統的な家庭の価値観を守ることを目的としている。

実践女学校で学んでいる中国の女子学生は、自由な環境で大きな変化を経験した。留学期間中、彼女たちは西洋の近代的な女性思想に深く影響を受け、女性教育と女性の独立の重要性を認識し、学会の組織や新聞・雑誌等の創刊、記事の執筆を通して女性教育の促進に取り組んだ。これらの女学生の多くは裕福な家庭から出身し、家事を好まない者も多かった。実践女学校の中国留学生支部の寮母である坂寄美都子は、これらの留学生が最初に学ぶことが多かったことについて次のように述懐している。「和服の着方、髪型の結び方、学校の規則、日常生活、食事のマナーなど、すべてをゼロから学ばなければならなかった。本来、これらの女学生は家庭が裕福で、自分で掃除をすることはなかった。しかし、下田歌子の校則により、学生は朝5時に起床した後、部屋、廊下、トイレを掃除しなければならないと規定され、生徒たちの悪い習慣が変わった。しばらく経つと、校則をしっかりと守り、朝5時半に起きて自分で部屋、廊下、トイレを清掃することができるようになった」³⁶。

3.2 女性の自立意識の確立

生活の変化と同時に、これらの女性留学生は多くの学びを得ていた。たとえば、秋瑾は師範科で学んでおり、その1年間のコースには日本語、教育、心理学、理科(物理学、化学、生物学、生理衛生学を含む)、地理学、歴史学、算数、絵画、体操、中国語、歌唱などが含まれていた。秋瑾は1学期のみの受講であったが、その中で9つの科目を受講しており、週に33時間の授業に加えて6時間の自習をしていた。さらに彼女は看護師の知識を学び、日本の関連書籍を参考に『看護学教程』という本を翻訳した。この本は看護の理論と実践に関する詳細な知識を提供し、この職業が国と人々にとってどれだけ重要であるかを宣伝し、中国社会で看護の仕事が蔑視される封建的な見解に批判的な立場を取っていた³⁷。

当時の日本の物価は、一般的に「中国の3倍」と言われ、秋瑾にとっては書籍の価格が非常に高いと感じられた。経済的に困難な状況から、秋瑾は質素な生活を送らざるを得なかった。そのような状況下で彼女は一文も無駄にせず、学費と食費以外のお金の大部分を必読の参考書の購入に充てた。また、彼女の夫の家は裕福であったことや、彼女自身は他の中国の女性と同様に幼少期から纏足であったことから一般的には人力車を利用するような状況にある中でもその選択をすることなく、常に自分の足で歩行することを

³⁵ 方祖猷 2017年前掲書、p262参照

³⁶ 周一川 2007年前掲書、p40参照

³⁷ 鄭云山 陳德禾 1986年『秋瑾評伝』河南教育出版社、p42-43参照

選んだ。これらのことから彼女の自意識の強さが窺える。

秋瑾は自分自身が日本に留学するだけでなく、女性が学校に進学することを主張し、あらゆる機会を活かして他の女性の教育を支えた。1904年、日本にいた彼女は湖南第一女学堂が保守的な派閥による破壊の影響で運営が難しくなっていることを聞き、すぐに手紙を送り、熱心に湖南第一女学堂の学生たちを日本に留学させるよう招待した。秋瑾はこうして迎えた女子学生たちの世話をし、彼女たちの困難の解決を手助けする用意があった。秋瑾は「致湖南第一女学堂書」で次のように書いている。

「今聞貴学堂、遭頑固破壊、然我諸姐妹切勿因此一挫、自廢其志、而永永沈埋男子压制之下。欲脱男子之範圍、非自立不可。欲自立非求学不可、非合群不可。東洋女学之興、日見其盛。人人皆執一芸以謀身。上可以扶助父母、下可以助夫教子、使男女無坐食之人。其国焉能不強耶。我諸姐妹如有此志、非游学日本不可。如愿来者、妹处俱可照拂一切³⁸。（拙訳：現在、湖南第一女学堂が頑固な思想によって破壊されたとの報告を聞いた。しかし、私たちの姉妹は決して打ちのめされてはいけない。自分自身を落胆させ、永遠に男性の压制を受けるべきではない。男性の支配から解放されたいのであれば、自立する必要がある。自立を望むなら、教育を受け、団結しなければならない。日本の女子教育はますます繁栄しており、全ての女性が生計を立てる技術を持っている。親を支えることも、夫を子供に教育することもできる。男女を問わず、座食する人はいない。このような国が強大でないはずはない。皆さんがこのような志を持っているならば、ぜひ日本に学びに来てほしい。日本に到着した際には、私がすべての面倒を見る。）」

1905年、秋瑾が再び日本に留学した際、偶然にも留学仲間である王時澤の母親が湖南省から東京を訪れた。秋瑾は彼女を熱心に歓迎し、王時澤はこのことを次のように回顧している。「秋瑾は私の母親が来ると、熱心に歓迎し、親しみやすい態度で接した。彼女は私の母親に男女平等、女性の教育の重要性について何度も話し、最終的に母親を日本に留学させるよう説得した。ちょうどその時、湖南からの公費留学生も師範科に入学し、同郷の仲間が多かった上に、秋瑾の説得もあり、母親は日本での上業を決意した。母親は年齢が比較的高く、体調もあまりよくなかったが、秋瑾は彼女を非常に丁寧に世話し、労働が必要な場合は常に先回りして代わりに行き、母親が苦勞しないよう心がけた」³⁹。

清朝末年の中国女性留学生たちは、日本で西洋の人権思想と接触することで、女性が男性に劣るものではなく、封建的な思想による抑圧と束縛によって男女の不平等が生じていることを認識した。そのため、女性の権利を求めることは非常に重要であると考えた。こうした女性は少数ではあったが、近代中国の女性教育と女性解放において重要な役割を果たした。彼女たちは中国の女性教育に力を尽くし、中国の女性に自分たちの自由と男女平等を求める行動を続けるよう訴えた。また、彼女たちは実際の行動で、家庭が女性の唯一の運命ではなく、女性にも教育を受ける権利があり、自己独立が必要であることを示した。

3.3 フェミニズムの普及

日本に留学する女子学生は、女性の権利を求めて新聞の発行や文章の掲載を通じて社会と個人に対する彼ら自身の意見を表明していた。女子学生は、フェミニズムの思想をもとに、独立の意志と要求を伝えるために文章を書いた。当時、新聞と雑誌は女性が自己意識を表現する主要な手段であったため、彼らは多くの困難を乗り越え奔走しながら、さまざまな女性向けの新聞と雑誌を創刊した。

湖南省衡山出身の陳擷芬は、中国の近代女性の中で最も早く日本に留学した一人であり、また近代中国で最初の女性向け新聞と雑誌を創刊した人の一人でもある。1899年に、陳擷芬は上海で中国初の女性向け雑誌である「女報」を創刊した。1903年7月、陳擷芬は父親とともに日本に渡った。陳擷芬が東京で編集した「女学報」は、上海で発刊した新聞を引き継いだものであり、中国女子留学生によって創刊された

³⁸ 秋瑾 1974年『秋瑾集』長風図書公司、p32

³⁹ 王時澤 1981年「回憶秋瑾」『秋瑾史料』湖南人民出版社、p123

最初の新聞の一つでもあった。「女学報」は女子教育を推奨し、男女平等などのスローガンを提唱した。

1904年9月24日、秋瑾は東京で雑誌「白話」を創刊した。秋瑾は書物や新聞が人々の知識を広げ、感動を与えるのに最も適していると考え、書物の刊行に熱心であった。この雑誌は男女の平等を提唱し、女性の教育を呼びかけることを主要な目標とした。秋瑾は「白話」の創刊号で発表された「敬告中国二万万女同胞」の記事の中で、以下のように記している。「諸位、你要知道天下事靠人是不行的，総要求己為是。當時那些腐儒說什麼「男尊女卑」「女子无才便是德」「夫為妻綱，這些胡說，我們女子要是有志氣的，就应当号召同志与他反对。陳後主興了纏足的例子，我們要是羞耻的，就应当興師問罪；即不然，難道他捆着我的腿？我不会不纏的么？男子怕我們有知識、有學問、爬上他們的頭，不准我們求學，我們難道不会和他分弁，就忘了么？這總是我們女子自己放棄責任，樣樣事体一見男子做了，自己就樂得偷懶，凶安樂。男子說我没用，我就没用；說我不行，只要保着眼前舒服，就作奴隶也不問了。自己又看看无功受禄，恐怕行不長久，一听见男子喜歡脚小，就急急忙忙把他纏了，使男人看見喜歡，庶可以藉此吃白飯。至于不叫我們讀書、習字，這更是求之不得的，有什么不贊成呢？諸位想想，天下有享現成福的么？自然是有學問、有見識、出力作事的男人得了權利，我們作他的奴隶了。既作了他的奴隶，怎么不压制呢？自作自受，又怎么怨得人呢？這些事情，提起来，我也覺得難過⁴⁰。（拙訳：各位。あなたは知らなければならない。この世のことを人に頼るのはよくないことで、いつも自分を頼りにするべきである。「男は尊く女は卑しい」とか「女は才能がないのがすなわち徳である」などくだらない学者たちが言う時、私たち女性が志を持っているなら、仲間を呼びかけて反対すべきであると考え。陳後主が始めたこの纏足の罪を問うべきだ。それでも彼らは足を縛るだろうか。縛らせることなどできるだろうか？男は、我々が知識を得、学を得、彼らの頭上に上るのを恐れて、我々が学を求めることを許さない。我々が彼らと争うことはできないだろうか？争わずに服従していいのだろうか？こうなったのは、我々女がこれまで自らの責任を放棄し、様々なことを男がするのを見て、これ幸いとなまけて楽に暮らそうと思った。男が「お前は役立たず」と言えば自分は役に立つ人間だと思わず、「お前はだめだ」と言えば、ただ目の前の楽な生活を保つために奴隷になるも問わない。勞せずして報酬をもらい、それか長く続かないのを恐れるあまり、男は足が小さいのを好むと聞けば男が見て喜ぶように一生懸命に縛り、どうにかこれを利用してただ飯を食う。我々に勉強させず、字を習わせないことに至ってはさらに結構なことと考え、何も反対する理由も持たない。だが各位、ちょっと考えてほしい。この世に、働かなくて享受できる幸福というのがあるのだろうか？学問があり見識があり、力を尽くして事を成す男が権利を獲得し、我々が彼らの奴隷になったのは当然のことだ。彼の奴隷になったからには、抑えつけられるのは当然のことだ。自業自得なのだから人を怨むことはない。このような事柄に触れるのは、私も辛い。）」

この文章を通して、秋瑾は当時の女子学生たちは封建社会における女性の厳しい抑圧を勇敢に暴露し、封建思想の女性に対する迫害を指摘し、これを批判した。彼女たちは他の女性の自己意識を喚起し、一人一人の女性が独立した存在になることを望んでいた。女性が抑圧から解放されるためには、経済的な独立と人格的な独立を実現しなければならず、そのためには女性教育を受け、生計を自立させる能力を身につけることから始めなければならないとした。それにより女性の社会的地位が向上し、男女平等が実現するという信念に基づいていた。

また、7年後の1911年4月27日、東京で「留日女学会雑誌」が創刊された。編集者兼発行人は秋瑾の親友であり、秋瑾と同様に女性の権利思想を積極的に宣伝した唐群英だった。国家の存亡が危機に瀕している時、彼女は中国の女性たちが男性と共に国家と民族の存続を守る責任を共に負うべきであると考えた。雑誌は女性が自身の特性に基づいて、女性解放を実現すべきであると提案した。そこでは女性は性格的に柔軟で忍耐強いという特徴に従って、最も重要で緊急なことを三つ行うべきだとされた。第一に、教育普

⁴⁰ 秋瑾 1974年前掲書、p5-6

及に力を入れること、第二に、社会活動に努力し、家庭と国家の繁栄を追求すること、第三に、医療救護に従事することである。女性自身が得意とする実務に従事することは、家庭にとって有益であり、社会と国家にとっても有益である⁴¹。この論理は、当時の女性の覚醒に役立つだけでなく、女性解放をどのように理解すべきかにも役立つ。女性解放は法律による平等な地位が尊重されるだけでなく、自然界に授けられた異なる特性が尊重され、男女が各自の得意な分野で全面的な発展を遂げるために行われるべきであり、これによってすべての人々が平等で自由かつ包括的に発展することができると考えられていた。

4. 女子教育思想の土着化

下田歌子は「帝国婦人協会⁴²主旨」において、西欧の「Feminism」を直訳したような女子教育は、我が国の少女に体に合わない服を着せるようなものと批判している。下田が実践女学校設立に当たって掲げた教育理念の一つは、設立当初の「学校規則」にあるように、女性に求められる道徳や品性の涵養であり、「良妻賢母」の育成である。当時の日本の女性は、社会的にはもちろん、家庭内でも低い地位に置かれていた。そこで下田は、品格のある「良妻賢母」を育成することによって、女性が家庭内で果たしている母や主婦としての役割の重要性を広く世の中に喚起し、それによって女性の家庭内での地位と女性に対する社会的な評価を高めようとしたのである。しかし、下田歌子の中国女性への教育は、その発展において、彼女の期待や予想をはるかに超え、さまざまな積極的な影響を生み出した。

4.1 フェミニズムの土着化理論に関する考察

上野千鶴子は「性差別には、それを生み出す文化的土壌があり、したがってフェミニズムもまた、文化の数ほどちがってくるはずだ。つまり、フェミニズムは、安直に、輸出したり輸入したり手合いのものではない。日本のフェミニズムは、決して借りものでない、その固有の存在意義と文化背景とを持っていた。もちろん日本のフェミニズムは、アメリカから大きな影響を受けたけれども、それは何より文化の相違をこえて、抱えていた問題の共通性と同時代性においてであって、日本のリブはそれ固有の内発性を持っていた。」⁴³と指摘した。

1893年9月、下田歌子は実際に内親王教育を目的とした各国の女子教育状況の視察のために日本を発ち、イギリスに滞在した後、アメリカを経て1895年8月に帰国した⁴⁴。西洋文明に直接肌で触れる経験とヨーロッパの各国からの日本に対する客観的な視線を通じて、下田は国の発展と繁栄のために先ず女子教育を発展させなければならないと考えた。

しかし下田は、イギリス女性の権利が男性を遥かに超越していると考え、これが社会に不利であるとも主張している。彼女は、「東洋女徳の美」で、「和魂洋才ならぬ東洋女徳の美と西欧科学の智をもって女子教育に当たろう」と考え、東洋的な温和で服従的な女性を育てるべきだと述べている⁴⁵。このように下田は、西欧の女子教育思想を受容しつつ、日本の伝統的女子教育観と融合した良妻賢母主義の教育を提唱し、女性は妻や母としての役割を果たすことで国家に貢献し、国民として統合されるべきとした。

下田の「東洋女徳の美」を育む教育は後に中国の女性の覚醒を促進し、辛亥革命時代に活躍した女性運

⁴¹ 周一川 2007年前掲書、p54参照

⁴² 帝国婦人協会の目的は、これまで上流階級に偏っていた婦人団体を広く一般に及ぼして全国的な組織とし、新時代に生きる日本女性としての教養と自覚を高め、精神的自立と生活改善をはかるというものだ。

⁴³ 上野千鶴子 2006年『女という快樂』勁草書房、p113-114

⁴⁴ 香川せつ子 2021年「下田歌子と津田梅子—西洋文化の出会いと女子教育の創出」『下田歌子と近代日本：良妻賢母論と女子教育の創出』勁草書房、p94参照

⁴⁵ 周一川 2007年前掲書、p22-23参照

動家を育てた。彼女たちの中には女性運動の指導者になり、同時に中国の女子教育の発展に貢献した主要な人物もいた⁴⁶。下田歌子はおそらく、留学生である王昌国、林宗素、張漢英などが、彼女が提唱した「東洋女徳の美」の概念における従順さや服従を学ばず、代表的な女性平等権利を追求する運動家として中国の政治舞台で活動することは予想していなかっただろう。

1912年3月、日本の留学生である林宗素は上海で女子参政同志会を創設した。この組織は、女性の参政権を獲得することを目的として、積極的な活動を展開した。南京臨時政府が設立されてから5日後、会長の林宗素は全会員を代表して臨時大総統の孫中山に面会し、女性に完全な参政権を認めるよう要請した。孫中山はこれを賞賛し、将来女性に完全な参政権を与えることを約束した。このニュースは広く報道され、中国の女性は大いに励まされたが、保守的な勢力から激しい反対を受けた。3月11日、「中華民国臨時約法⁴⁷」が公布されたが、その中に男女平等の規定はなかった。そのため、唐群英らは孫中山に請願し、約法の内容を修正するよう求めた。3月19日、参政院が女性の参政権の問題を討論する際、唐群英らは議員たちと激しい討論を行いた。双方の対立が激化し、21日の参議院会議で武力衝突が発生したが、大総統の仲介により事態は収束した⁴⁸。

以上のことから、下田歌子の女子教育思想を中国の女子留学生は完全に受け入れていないことが分かる。彼女たちの教育の目的は、女性を良妻賢母にすることではなく、国家や社会に対して意義のある人々になることだと考えている。女性は妻や母になる前に、まず独立した個人であり、男性と同等の地位を持ち、社会の責任を果たす権利と義務があると信じている。この現象は、中国でのフェミニズム思想が土着化していると思えることができると考えている。

4.2 近代湖南省における女子教育の発展

民国初期、湖南省は全国の女子教育の発展の先駆けであった。1911年12月、王昌国は湖南女子国民会を設立し、その拠点を長沙烈士祠に置き、「知識は人類が共有するものであり、男性だけに提供されてはならない」とのスローガンを掲げ、男女教育の平等を宗旨とし、女性の学業権利の回復を要求した。1912年3月、湖南省政府は「湖南暫定学制大綱」を発表し、女子教育を含む教育制度を6つの大項目に分類した。この方針は、小学校の男女共学を規定するだけでなく、中等教育、師範教育、実業教育において独立した女子高等学校、女子師範学校、女子職業学校を設立することを認め、特に女子職業学校を設立することを許可し、女性が職業技能を習得し、独立して生計を立てることができるようにした⁴⁹。また、この規定は、社会的な性別観念である「女性は学がないのが徳である」との考えに強烈な衝撃を与えた。同時に、さまざまな女性団体が湖南省で次々と設立され、ほとんどが男女教育の平等を出発点としており、女子教育の繁栄のための良好な社会環境が築かれた。

湖南省の女子留学生たちは学業を修了し、一部の人々は湖南省に戻り、女子学校を設立し、湖南省の女子教育の発展を直接的に促進した。1913年5月、唐群英と張漢英が創設した「長沙女子法政学校」が正式に開校した。同年7月、長沙には「自強女子職業学校」と「女子美術学校」も設立された。これらの学校は文化科目と実践科目を提供し、女性の文化的知識を増やすだけでなく、実務的な能力も向上させた。

職業教育に関して、唐群英は女性が社会で地位を持たず、男性と同等の権利を享受することが難しいと考えていた。これは文化的に無知であるだけでなく、女性が長い間男性に依存して生きてきたためであり、独立した能力を持たなかったからである。1911年、唐群英は日本での「留日女学会雑誌」に記事を寄せ、

⁴⁶ 周一川 2007年前掲書、p24-25参照

⁴⁷ 辛亥革命で成立した中華民国で最初に制定された国家基本法で、将来的な本格的な憲法までの暫定的憲法であるが、中国で最初の国民主権、三権分立、議会制などを定めた近代憲法として重要である。

⁴⁸ 周一川 2007年前掲書、p57参照

⁴⁹ 万瓊華 2010年前掲書、p85参照

次のように指摘した。「我が国の女性は何千年もの間、依存し、奉仕し、国家の存在を知らない。この状況が発生した理由は、何千年もの封建的な剥奪階級の愚かな思想の影響であり、女性が家から出ず、読み書きをせず、技術を学ばないため、徐々に自立能力を失い、男性の従属者となった」。当時の時代背景を考えると、女性の職業教育が社会でますます重要視されるようになっていた。唐群英は、婦人が正当な職業に従事しないために生計を維持できず、男性に依存せざるを得ないことから、女性にも職業教育を提供し、自立して生計を立て、経済的、政治的にも男性と同等の地位を獲得できるようにしたいと考えていた⁵⁰。

また女性だけでなく、留学経験のある男性も湖南省の女子教育の発展に貢献した。1904年、朱剣凡は日本から帰国し、寧郷速成師範学校で教鞭を執り、生理学、心理学、教育学、市民教育などの科目を教えた。朱剣凡は学生から尊敬を集め、数か月の教育実践を経て、教育に対する喜びと価値を感じ、学校を設立したいという考えが芽生えた。彼が日本から帰国した際、湖南省の中でも特に長沙の教育の男女差別が非常に大きいことに気付いた。当時、高等学堂が16校、中等学堂が7校あったが、女子学堂は3校のみであり、さらにその規模は非常に小さかったため、女子学堂を設立する決心をした。1905年5月、朱剣凡は受け継いだ家屋の一部を寄付し、新しい女子学堂を設立した。学校の目的は「民智を開き、国を救い、女性を解放すること」で、設立当初から師範科と簡易師範科を開設し、小学校と幼児教育園を併設していた。1908年、学校は周南女学堂と改名され、裁縫、音楽、体操などの専門科目を含む1年半の専門科目が加えられた。1912年、学校は湖南私立周南女子師範学校と名をあらため、4年制の師範科本科、中学部、小学部、幼稚園、裁縫などの専門科目が開設された。また1916年には、学校は湖南私立周南女子中学と改名し、女子師範学校から一般的な女子中学に転換した。1920年、湖南省には公立の女子中学が設立されていなかったため、省政府は学校名を湖南代用女子中学校に変更し、学校は公立の女子中学の地位を獲得した。このようにして、周南女校は公的に認められ、運営費も確保された⁵¹。中華人民共和国成立前に至るまで、朱剣凡の指導のもと、周南女校は向警予、蔡暢、楊开慧などの女性革命家や勞君展、魏璧などの女性科学者を育成し、国家の発展と民族の復興に不可欠な存在となった。

5. 考察

清末民初の女性の日本留学は、中国社会にとって時代を超えた意義を持つと言える。日本へ留学した女性は新たな文化と思想の教育を受け、自立意識が芽生え、男女平等を求める最初のステップを踏み出した。近代日本の女性の留学教育が中国の女性に与えた影響は次の3つの点にまとめられるだろう。

第一に、中国の女性の自己意識の覚醒を促進した。20世紀初め、西洋の人権や男女平等の思想が中国の女性に大きな影響を与えた。その理由は、女学生たちが留学を通じて西洋の政治思想と科学文化知識を学び、中国の女性の中で最初に自己意識が覚醒したグループとなり、女性解放運動でリーダーシップ的な役割を果たした。

第二に、中国でのフェミニズム思想の普及に貢献した。清末には、女子留学生たちは自分たちの組織と雑誌を利用して、新しい思想と観念を宣伝した。主な議論は以下の5つに要約できる。1) 伝統的な男女不平等の思想に反対し、男女平等を提唱した。2) 伝統的な「女子無才便是徳」の思想に反対し、女子教育を提唱した。3) 纏足に反対し、天足⁵²を提唱した。4) 見合い結婚に反対し、自由な結婚を提唱した。5) 国家の重要事項について、男女を問わず全ての人が責任を持つべきであると主張した。留学生たちの努力により、新しい教育を受けた女学生たちが急速に成長し、自己の解放と男性と同等の権利を獲得するために

⁵⁰ 劉宏偉 2014年「論唐群英的女子教育思想与实践」修士論文、p21参照

⁵¹ 張婷 2014年「近代留学生对女子教育発展影響研究—以湖南地区為例」修士論文、p22参照

⁵² (清末から中華人民共和国成立以前のいわゆる旧社会の言葉) 纏足をしたことのない足。

声高に叫び、不屈の努力を続けた結果、過去に女性が抑圧されていた状況が大幅に改善された。

第三に、中国の女子教育に対して積極的な影響を与えた。留学教育の発展によって中国本土の女子教育も発展し、女性たちは良質な教育を受ける機会が増え、自立して生計を立てる能力を習得できるようになった。その結果、ますます多くの女性が社会に参加し、経済的な独立を追求するようになった。さらに、これらの女性は教育を受けた後、フェミニズムに対する新たな理解を持つようになり、女性解放運動に大きな影響力を与えた。

また、近代の女子留学生は、社会参加に限らず、社会運動や革命運動に積極的に参加し現状の打破を訴え、中国近代史の発展において無視できない役割を果たした。この部分の内容は、今後の研究で詳細に検討したい。

参考文献

【日本語文献】

奥田暁子 2003年『概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房

上野千鶴子 2006年『女という快楽』勁草書房

梅垣千尋 2023年「フェミニズムの萌芽」『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房

香川せつ子 2021年「下田歌子と津田梅子—西洋文化の出会いと女子教育の創出」『下田歌子と近代日本：良妻賢母論と女子教育の創出』勁草書房

溝口靖夫 1964年「キリスト教の土着化の社会学的理解—その方法論的考察—」『神戸女学院大学論集』p17-30

【中国語文献】

陳晨 2022年「20世紀80年代中日婦科学 / 性別研究本土化的比較考察—以李小江与上野千鶴子の理論実践為線索」『日本文論』p144

方祖猷 2017年『晚清女権史』浙江大学出版社

劉宏偉 2014年「論唐群英的女子教育思想与实践」修士論文、p21

聶会会 2007年「中国近代女子教育發展歷程中的「女性参与」探究」修士論文

李秋艷 屈振輝 歐陽林舟 2018年「近代湖湘女留学生与婦女運動」『当代教育理論与实践』p148

秋瑾 1974年『秋瑾集』長風圖書公司

実藤恵秀 1983年『中国人留学日本史』生活・読書・新知三聯書店

王時澤 1981年「回憶秋瑾」『秋瑾史料』湖南人民出版社

万瓊華 2010年『近代女子教育思潮与女性主体身分構建—以周南女校（1905-1938）為中心的考察』中国社会科学出版社

嚴安生 2018年『灵台无計逃神矢—中国人留日精神史』生活・読書・新知三聯書店

張婷 2014年「近代留学生对女子教育發展影響研究—以湖南地区為例」修士論文、p22

周一川 2007年『近代中国女性日本留学史（1872年～1945年）』社会科学文献出版社

鄭云山 陳德禾 1986年『秋瑾評伝』河南教育出版社